

修士論文(要旨)

2010年1月

メモ分類による聴解過程の可視化への試み  
ーニュースを使った初中級レベルの聴解授業ー

指導 齋藤伸子 先生

国際学研究科

言語教育専攻

208J4015

播岡恵

## 目次

第1章	はじめに	1
1.1	研究の背景	1
1.2	研究の目的	2
第2章	先行研究	3
2.1	聴解のメカニズム	3
2.1.1	聴解過程における音声知覚と理解	3
2.1.2	第二言語の処理過程	5
2.2	参照する聴解ストラテジー	7
2.3	教育的視点で捉えた聴解技能	13
2.4	先行研究のまとめ	18
第3章	聴解素材としてのテレビニュース	19
3.1	本研究におけるニュースの扱い	19
3.2	CLBにおけるニュースの扱い	20
3.3	テレビニュースの利点	24
3.3.1	ニュースの特徴から捉えた利点	25
3.3.2	学習者、及び理解過程の視点から捉えた利点	26
第4章	調査概要	27
4.1	調査の全体図	27
4.2	調査の分析対象	28
4.3	第一次調査	34
4.4	第二次調査	37
4.5	第三次調査	38
第5章	調査結果の分析、及び考察	41
5.1	第一次調査	41
5.2	第二次調査	45
5.3	第三次調査	52
第6章	総合的考察	60
第7章	今後の課題	66
	参考資料	

## 1. はじめに

言語学習の初期段階における、音声言語の Input は非常に重要な役割を担っているにもかかわらず、一瞬のうちに消えていく音声言語に含まれている情報を瞬時に理解するためには、記憶という不可視の能力に頼る部分があり、そのため理解過程の段階的な把握や、教師、学習者が直面している問題の把握が困難であるという面がある。このような問題を踏まえ、本研究では初級テキストを終了した学習者（以下、本学習者）を対象とし、聴解素材としてニュース素材を扱うことにより、タスク遂行の下位技能及び理解過程の可視化について考察する。

本研究では（１）学習ストラテジーに着目し、本学習者が音声情報を理解する際に必要な下位技能の可視化、（２）学習者のメモや回想法により採集したプロトコルデータによる本学習者の理解過程を可視化、という二つの研究課題に対し調査を行い、その結果から課題遂行をするのに必要な技能の特定と、ある技能練習を繰り返すことによって得られる学習効果の特定について検討することとする。

## 2. 先行研究と本研究の理論的枠組み

聴解については、その処理過程において読解との類似点も多く指摘されているが、音声や語彙などの様々な情報を同時に処理するという点においてはより複雑であり、学習者の困難点も様々であるという特徴がある。

本研究では可視化の試みとして、（１）知覚、理解過程に関わる問題点の整理、（２）ストラテジーの一つである「選択的注意」の繰り返し練習による効果、（３）タスク遂行の支えとなる下位技能、という３点に着目する。さらに、聴解過程を認知的視点と教育的視点の両面から捉えるために、Goh (2002) が定義したタクティクスとカナダ政府が作成した Canadian Language Benchmarks 2000 (CLB) を参照する。

## 3. 聴解素材としてのテレビニュース

本研究では、ストラテジーの一つである「選択的注意」を取り上げ、その技能練習としてニュース素材を扱う。ニュース素材の利点については、そのテキストとしての特徴、さらに学習者の理解過程という二つの視点で整理し、初期段階において、一瞬に消える情報から瞬時の理解に必要な情報を特定できる技能の重要性、さらには繰り返し練習することの学習効果の可能性について考察する。

## 4. 調査概要

本調査では、理解過程の可視化を試みるにあたり、課題達成を支える技能の細分化だけでなく、学習者がどの情報に注目しているのかを明らかにするために、学習者の回答とメモに注目し、統計的処理の結果を参考にしながら学習者の理解過程を段階的に捉えることとした。

調査は、第一次調査（ニュースを聴く際の下位技能の細分化と Output の方法についての検討）、第二次調査（メモの分類とメモによる理解過程可視化の検証）、第三次調査（聴解技能の可視化とメモとプロトコルデータによる理解過程の可視化の試み）の3段階に分け実施した。一連の調査手順、使用したタスク課題は同じだが、第一次、第二次調査は授業の一環として取り扱ったもので、どのようなデータが分析対象になり得るのか、また、どのような Output 形式であれば技能別の困難点が明らかになるのかということを中心としたのに対し、第三次調査では、それまでの結果を再検証することを目的として、都内の日本語学校（3校）に在籍する韓国語母語話者を対象に調査を行った。

## 5. まとめ

一連の調査結果を踏まえ、ニュースを課題として扱う場合の全体的な傾向並びに個人レベルでの問題点という2つ視点からの考察を行った結果、以下の3点が明らかになった。

- (1) 統計処理に基づく考察は、授業目標、授業計画といった方向性を考える上では重要な指針と成り得るが、学習者の発達段階途中の能力は、テストなどの正答には必ずしも表れてこない。また、上位学習者の印象と、難易度で表された数値とが一致しなかったことから、学習者一人ひとりの課題や困難点は統計的な数値からは表れてこない場合がある。
- (2) 聴解技能の細分化により、技能習得に伴う困難点は学習者により異なることが明らかになった。しかし、一斉授業の場合、教室内の活動や学習目標を全体レベルで捉えがちになるため、タスク活動では課題達成の結果だけに着目するのではなく、下支えとなる能力レベルの判定基準、さらにはタスク毎の下位技能を明確にする必要がある。
- (3) タスクシートは、どのように質問の妥当性を検討しようとも、特定の問題についての正解・不正解を判定するに留まるため、設問の意図、すなわちその問題で判定する能力が何かを明確にすることが必要不可欠である。また、メモ、スクリプトからは、学習者の Output の量に差があるものの、それらを利用することにより、学習者は「理解の修正」、「自己評価」を自発的に行うきっかけとなっていることが、プロトコルデータより明らかとなった。

## 6. 今後の課題

本研究では、ニュースを聞くための聴解技能に特化し、「型」を使った繰り返し練習の効果を論じたが、体系的聴解指導を行う上で、「即聴語（聞いた音から漢字、語彙を瞬時に連想できる）」（岡崎 2002）をどのように増やしていくのかという問題は軽視できない。特に日本語の場合、学習者の母語による語彙（漢字）に対する概念差もあることから、学習

者一人ひとりの困難点が異なり、また、技能練習に偏ってしまうことで、限られたタスクやテキストにしか適用できなくなるという問題もある。

このようなことから、初期段階における聴解授業では、積み上げ式の技能練習だけではなく、「即聴語」のような付随的な技能の扱いをも考慮したカリキュラム作成が必要だと思われる。

## 参考文献

- (1)大石晴美 (2006)『脳科学からの第二言語習得』昭和堂
  - (2)岡崎志津子 (1993)「初級段階でのニュース教材の導入」『日本語教育』第79号  
pp. 148-159
  - (3)海保博之・原田悦子 (1993)『プロトコル分析入門』新曜社
  - (4)門田修平 (2007)『シャドーイングと音読の科学』コスモピア
  - (5)金庭久美子、川村よしこ (1999)「TVニュース構成の特徴分析とそれを支える表現」  
『日本語教育』第101号. pp. 1-10
  - (6)金庭久美子 (2001)「学習者はTVニュースをどのように聞いているかー日本語教育に  
おける聴解能力の測定ー」横浜国大言語研究 第19号, pp. 59-69 69-59
  - (7)河野守夫 (1992)『英語授業の改造 (改訂版)』東京書籍
  - (8)———— (1997)「リスニングのメカニズムについての言語心理学研究」ことばの科学  
研究会 (編)『ことばとコミュニケーション』第1号 英潮社 pp. 5-31
  - (9)———— (2001)『音声言語の認識と生成のメカニズム:ことばの時間制御機構とそ  
の役割』金星堂
  - (10)竹内理 (2000)『認知的アプローチによる外国語教育』松柏社
  - (11)水田澄子 (1995)「日本語母語話者と日本語学習者(中国人)に見られる独話聞き取りの  
ストラテジー」『日本語教育』87, pp. 66-78
  - (12)宮城幸枝 (1998)「初級からの聞きとりの指導ー『初級聴解練習 毎日の聞き取り 50日』  
の開発をとおしてー」『東海大学紀要 留学生教育センター』pp. 28-38
  - (13)横山紀子 (2004)「第2言語教育における聴解ストラテジー研究 ー概観と今後の展  
望ー」『第二言語習得・教育の研究最前線ー2004年版ー』日本言語文化学会  
pp. 184-201
  - (14)———— (2005)「対面場面における聴解過程の分析ー「モニター」の適用範囲を指  
標としてー」『共生時代を生きる日本語教育ー言語博士上野鶴子先生古稀記念論集ー』  
凡人社 pp. 262-289
  - (15) Council of Europe (2004)『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照  
枠』吉島茂、大橋理枝 (訳、編)朝日出版社
  - (16) Celce-Murcia, M., & Dörnyei, Z., & Thurrell, S. (1995). “Communicative competence:  
A pedagogically motivated model with content specifications” *Issues in Applied  
Linguistics*. 6, 2. pp. 5-35.
  - (17) Goh, Christine C. M. (2002). “Exploring listening comprehension tactics and their  
interaction patterns” *System*, 30. pp. 185-206
  - (18) O'Malley, J. M., Chamot, A. U., & Kupper, L. (1989). “Listening comprehension  
strategies in second language acquisition” *Applied Linguistics*. 10. pp. 418-437
- URL (参考ウェブサイト)**
- (1) 国際交流基金日本語国際センター <<http://www.jpfi.go.jp/j/urawa/index.html>>  
2009年7月9日検索
  - (2) Canadian Language Benchmarks 2000 c <<http://www.language.ca/>>  
2009年7月9日検索